

特別講演 ①

保育と子どもの発達

サラ・フリードマン (元 NICHHD、CNA 健康管理政策研究局調査部長)

保育（チャイルドケア）とは何か？

保育（チャイルドケア）は、家庭の子育てを助けるためになされてきたものであり、「母親が育児にたずさわれない時間に、乳幼児の定期的なケアを行うもの」と定義することができる。

保育環境は実に多様なものであり、保育場所（家庭内や家庭外、家庭外の場合の預け先）や保育の対象となる子どもの数、子どもと保育者との割合、保育の提供の仕方、保育の質などは、いずれも、子どもの発達との関連を検討するときに考慮すべき重要な要素である。同様に、家庭の状況や子どもの性格や特徴も子どもの発達に深く関係するものであり、保育の効果を知るためにはこれらについて同時に測定を行うことが必要である。アメリカでは子どもを保育者に預けて働く母親が増加したことに対する懸念から、30年程前から保育と子どもの発達との関係についての研究が始まったが、現在では保育は子どもたちの発達にとって最適な環境を提供できるようにデザイン可能なものとして認識され、研究されるようになってきている。

保育と子どもの発達に関する研究成果

15歳まで長期にわたって追跡をおこなった NICHHD の研究を含めて、これまでの保育と子どもの様々な発達の側面（講演では母親への愛着の安定性、母親のセンシティブティ〈子どもの心を読み取る力〉、社会的スキル、認知的・言語的発達についての結果が報告された）との関連についての科学研究によれば、子どもの健やかな身体的、情緒的、社会的、認知的発達のためには、乳幼児を質の高い保育環境に置くことが極めて重要であることがわかってきた。科学者は、親や政策立案者が質の高い保育環境を実現できるよう、科学的根拠を持ってサポートすることができるのである。今後の研究課題は、子どもの望ましい発達につながる保育の条件は具体的にどのようなものなのか、また、よりよい発達の結果を実現するためには少なくともどの程度の水準の保育の質を社会が保証することが必要なのかを探り、提示することが求められている。

今後の研究の方向性

上記のように、子どもが受ける保育の良質さが重要

であることについては一貫した結果が得られてきてはいるものの、その効果の大きさや、他の重要な保育の要素の一つである保育時間の効果については研究間で未だ一致した結果が得られていないのが現状である。今後の研究の方向性として、研究に用いる様々な測定尺度の精度の向上や、保育者と子どもとの相互作用に関する測定方法を年齢や文化的背景にふさわしいものに精練していくこと、ランダムサンプリングや実験的介入研究などによってさらに信頼性の高い結果を得ていくことが必要であることが指摘される。

本講演では30年にわたる研究の歴史を振り返り、今日までの研究成果の推移を示して将来の研究の方向性の考察を行った。研究者が保育と保育の子どもに与える影響に関する研究を開始したときから現在までに、大きな研究上の進歩が遂げられてきたことがわかったことと思う。しかし、これから先の道のりはまだまだ長く、多くの課題を探求していかなくてはならないのである。

〈参考文献〉

Friedman, S.L., Melhuish, E. & Hill, C. (2010). Childcare Research at the Dawn of a New Millennium: An update. In Gavin Bremner and Theodore Wachs (Eds.) Wiley-Blackwell Handbook of Infant Development, second edition. Oxford: Wiley-Blackwell.

—プロフィール—

サラ・フリードマン Friedman, S.L.

元 NICHHD / アメリカ国立小児保健・人間発達研究所。コーネル大学で教育心理学修士号、ジョージ・ワシントン大学大学院で発達・実験心理学博士号取得。国立精神保健研究所、国立教育学院、国立小児保健・人間発達研究所を経て、現在、CNA 健康管理政策研究局調査部長。米国心理学協会、米国心理学会、米国応用予防心理学会、総合心理学会員。子どもの社会的・情緒的・認知的・言語的・身体的発達の研究に多く携わっている。

フリードマン博士の来日は、2000年7月に行われたチャイルド・リサーチネットワーク主催の国際シンポジウム「21世紀の子育てを考える」働く母親を支援するチャイルドケア」に始まって今回で6度目であり、その都度、子どもの発達に関する最先端の科学的研究の成果を私たちに紹介してくださっている。今回の特別講演でも、国際的にも高い評価を受けている NICHHD の保育と子どもの発達に関する長期追跡研究の結果とともに、過去30年にわたるアメリカの保育研究の流れや今後の研究の在り方についても多くの示唆を得ることができた。ここに、博士の講演の概要をお知らせする。

菅原ますみ (お茶の水女子大学 大学院人間文化創成科学研究科教授)